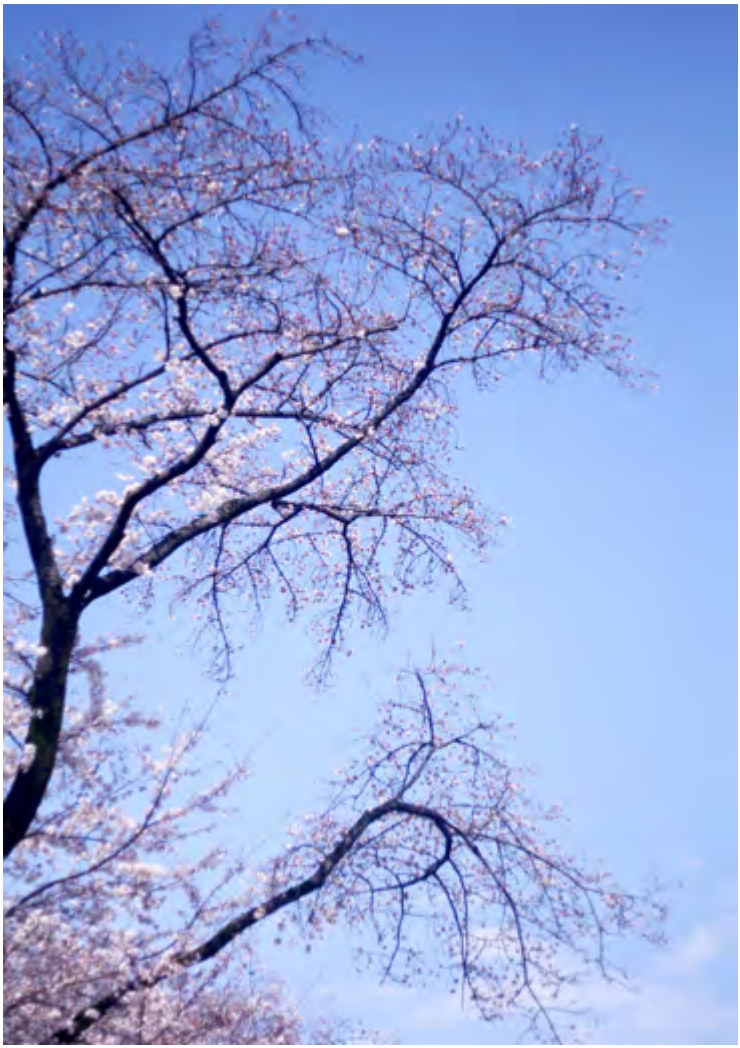
あさ 4

2019



春の夜の夢で絵を描くポルトガル

眼病や人・景・具象月おぼろ

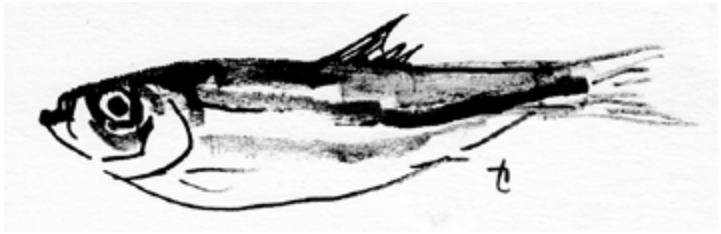
眼病や桜木のパレットを磨く

鎌倉や小路また小路の沈丁花

絵筆止めしばし三脚の花を見る

春の月大屋根の峯栗鼠のゆく

老大工ふしくれの手に子猫だき



絵と俳句・関合正昭

あと

四　月

須賀忠男

梅の花

東京　佐藤　喜孝

梅の花積んで来し豚湯氣をあげ

セキスイハウスひょいと上げるとつづみ草

あかんぼがあかんぼを見る寒の明

かるいなゐぺんぺん草の白い花

蜆蝶光のかげにみえかくれ

積みて崩す十七文字春闌

うららかやアンパンマンはけふも善

東京　石森　理和

桃の花

嬬恋の空ひろびろと春キヤベツ
春キヤベツ丸丸煮込みご馳走に
つくしんぼ土手もぼちぼち目覚め出し
桃の花急かされせかされ段飾り
春強風遅々とせりふはり雲

埼玉　大日向幸江

目借時

杉折に土筆和へ入れ農繁期
頭煮の鯛の骨までしやぶる男
アネモネに笑顔見せたり車椅子
二の腕の力衰ふ目借時
白々と夜の女雛の不安顔

東京　七郎衛門吉保

雑詠

皹は皸とありあかぎれや
皴(ひび)・皹(あかぎれ)昭和の余波(なごり)遠くなり
加湿器と外のひゅーひゅー二重奏
アルパカのごとふっくらと寒の梅
コンビニと我が家比べるおでん鍋

東京　篠田　純子

ふくら雀

ちょんちょこぴいのふくら雀の弾みをり
着膨れとふくら雀と風の音
積立の満期のはがきヒヤシンス
コンクリートの街に土の香春立てり
ミスソフィアの花の振り袖豆まきぬ

石川　定梶じょう

下萌

逃走す枯野の空の飛行雲
警蹕の声か立春星走る
鐘のない鐘楼春一番に堪ふ
少年に雄志あるべし凧の空
下萌はこの三叉路にいち早し

東京　須賀　敏子

夢すこし

桜桃の棒苗植ゑて夢すこし
春の風邪髪が何ともまとまらず
春一番豊洲市場の郵便局
西武線小田急線と探梅行
眼鏡買ふ水面近くに枝垂梅

東京　田中　藤穂

阿吽

阿と云ひて吽のきこえぬ寒さかな
木の枝のほのかなる艶寒明くる
今年も此処ガードレールに干大根
春寒し軽トラに積むコレラの豚
積らねば今日の春雪話のみ

三重　長崎　桂子

春の風

睦月下旬明けの西窓白い月
野水仙長寿言祝ぐ若者等
春風や手押し車に背を丸め
シャツズボン竿に絡まる春の風
春の風歩道くるくる鉋屑

東京　森　なほ子

声出して

声出して歌碑を読む人春隣
寒明や箱に林檎の萎びたる
揺れながら体積増すや石鹸玉
睡蓮の水面に朽ちて風光る
如月や霽れきらぬまま暮るる空

東京　赤座　典子

熱海温泉

春の凪飛行機雲のほしいまま
春岬トリコローレの遊覧船
フレンチや雲丹を包める帆立貝
あたみ桜目白の出入り激しかり
春めきて熱海のブーム再燃す

埼玉　秋川　泉

光の中

寒満月ぬぬっと出し橋の上
陽を受けしたてがみの艶春の馬
黄昏て残る明るさ梅香る
立春の風強き宵吾子走る
乾きたる土に芽あまたチューリップ

東京　佐藤　恭子

馬跳び

草青む馬跳びの馬ころがさる
春の草摘みて笑窪の深くなる
昭和の日みめうるはしき燕見し
トンボ手に道草食うてゐる父子
ひとり居の猫を鳴かせて青葉季

前月抄

雪になるまへの小雨のななめぶり　佐藤喜孝

吾子誕生その日を待ちて寒に入る　秋川　泉

正月の微細な埃射光かな　石森理和

きんとんの照りはなやかにお正月　大日向幸江

光の字書初展の勢揃　七郎衛門吉保

摩耶夫人もマリアも貞女鏡餅　篠田純子

積み残しありけり砂礫雪こんこ　定梶じょう

喜孝抄

切干や風と光を味方とし　須賀敏子

寒満月椎の葉蔭に光をり　田中藤穂

果物も今朝温める予防かな　長崎桂子

彩色の淡きが床し宝船　森なほ子

ほろよひの伯父さん初めて読むかるた　赤座典子

風光るおいしさうなる草ばかり　佐藤恭子

二月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

ハンカチもティッシュもないの枯柏　佐藤　喜孝

作者は句会で「組み合わせる下五が見つからず、保留していた上五中七に、本日の席題を当てたらこの句になりました」風の説明をされることが結構ある。表題句もこの範疇のものではと推測している。上五中七に枯柏を探し当てたのには驚嘆の一言。私が子供の頃に遊びに行った、山梨の旧家の三畳ほどの薄暗い厠に、山と積まれた枯柏色したちり紙を思い出しました。（吉保）

躬の内のどこか光った雪の朝　佐藤　喜孝

降り終わった雪がまだキラキラとしている朝、心の中の何かが反応した。雪の朝　という季語の素晴らしさが、その瞬間が、何かに変わるのだろうかとか、そのまま心に留まるのだろうか等、想像を掻き立てられてしまいました。（典子）

他愛なき喜劇なりしとおでん鍋　赤座　典子

このやうなかるがるとした、余韻のある句を作れたらなぁ、作りたいぁと常々思ふことである。鑑賞文の必要なし。短冊にでも書いて眺めながら一杯やりたくなる句だ。（喜孝）

冬日和鳥の巣箱にりすのゐる　秋川　泉

実際に見られた光景と伺いました。日の当たる巣箱から、なんと栗鼠が覗いている！　まさに絵本の一ページ！いつまでも見続けていたかったのでは？（典子）

吟行のランチ皆食べカキフライ　大日向幸江

昨年の「あを」12月号に掲載した短文「着物と俳句」に事の詳細を書きましたが、私と俳句の接点は正しく吟行から始まっています。場所は日比谷公園、集合場所は公園内松本楼レストラン、まずは皆でランチからです。園は銀杏の落ち葉で黄一色に埋めつくされている、これ正しく牡蠣のタイミング。多分皆さんのオーダーはカキフライ。（吉保）

原発に分断さるる冬木立　七郎衛門吉保

原発の存続に政治・司法含めて正に分断されてゐる。津波による原発事故でこの分断は住む場所のみでなく、住民の心まで分断された。勿論冬木立が分断されたのではない。「分断されり」と発表しましたが編集のミス、「分断さるる」に訂正します。（喜孝）

内匠頭も吉良も名君冬もみぢ　篠田　純子

季語の、冬紅葉には、枯色の中の鮮やかさと、枝にわずかに残っている侘しさと、二通りの風景があるようです。浅野内匠頭も吉良上野介もお殿様で哀れな最期。どちらの状況をも含んでいる面白い季語ですね。純子さん流石です。（典子）

嬉しくてさびし師走の今頃は　　定梶じょう

じょうさんには珍しく感情を表す言葉がありました。やはり師走は、常と異なる状況が、起きるらしい。いったい何が起きたのでしょう？（典子）

冬籠捨てられぬ布を柄合せ　　須賀　敏子

作者は家庭における日常、いわゆる家事を巧みに取り込んで、いつも感心する作句をされている。柄合わせをしながらキルトつくりとかパッチワークをイメージされているのだろうか。冬籠の寒さと中七の暖かみが妙。愛用本に二千六年に作句された斉藤裕子さんの句が掲載されていた。（吉保）

冬籠父の日記に我が名あり

衛兵に百舌鳴くイギリス大使館　　田中　藤穂

百舌と兵の組み合わせ。昭和十年にサトウ・ハチローの作詞した「もずが枯木で」を必ず想いだす。その三番の詩に思いを馳せる。「兄さは満州に行っただよ　鉄砲が涙で光っただ　もずよ寒いとなくがよい　兄さはもっと寒いだろ」。イギリスにも百舌は居るのだろうか。衛兵も母国の両親のこと、故郷の景色など思い出しながら、起立しているのかもしれない。（吉保）

冬の月宙鮮やかに清めらる　　長崎　桂子

冬の月の澄んだ美しさ。あまねく広がる空だけではなく、人々の心も澄み渡ります。とても素敵な句にめぐり会えました。（典子）

寒林へ礫どこかでこつと音　　森　なほ子

愛用本に掲載されている「寒林」の句は十五句。この内「寒林や手をうてば手のさみしき音」（柴田白葉女）「寒林にもの言へば声広がりぬ」（尾崎和子）と音の句が二句。作者も幹ばかりの音のない寒林に来て、その静寂を破りたくなったのでは。足元の礫を拾い、目標を定めることなく投げてみた。どこかでこつと、と寒林に音を作って楽しんでいるようだ。（吉保）

佐藤喜孝

田中　藤穂

下萌や黄帽の児童列長し
玄関に盆梅の香の満つる宿
春満月見よとの電話二人より

◎　小学生の通学時の光景か。郊外のやうだ。いま出生率が低いと云はれてゐるが、「列長し」とさうでもないよ反発してゐる。私もよく町でベビーカーを見かける。今も通りすがりの公園で相撲を取ってゐる三十人ほどの保育園児を見てきたところ。女の子VS男の子は大方男の子が負けてゐた。「列長し」に作者のささやかな希望、願ひが見えた。

◎　ホテルとは違ふ昔ながらの宿。玄関には盆梅の香に満ちてゐた。楽しい一夜の宿となること受け合ひだ。

◎　月もまんまるばかりがよいのではないが、やはり重たげに昇ってくる満月には見惚れる。近頃は「スーパームーン」とか「ストロベリームーン」とか新しい視点で月に関心が持たれてゐる。俳人には月への有人飛行とか、月の資源と云ふ話題より昔ながらの月で十分である。「いい月よ、見てみて」と二人からも電話が。豊かな精神生活である。

赤座　典子

芽柳や絵本特集書評欄
久々の雨に上向く紅椿
冴返る入札待ちの銅版画

◎　絵本を子供に買おうとすると余りの多さに驚き選ぶのに迷ふ。以前なら昔話、名作童話、伝記と選択肢も少なく済んだのだが……。作者もそんな思ひで絵本の書評欄を読む、楽しく迷はれたことだらう。「チューリップ」ではなく「芽柳」に作者の感性が光る。

◎　木々に限らず植物は雨に遇ふと活き活きとなる。梅雨時など猛々しくもなる。この句は椿の花が元気を取り戻し「上を向く」と観察したところが手柄。

ではあるが少々理がちなところがある。

◎　オークション市なのか、ネットオークションなのか。中七で俳句性が薄まってしまった。

大日向幸江

流し雛桟俵ぼっち手を離れ
春の雨ぬれ煎餅の舌ざはり
笹鳴きを聞いた事すら秘密めく

◎　流し雛の句はよく目にするが、残念ながら出あったことはない。

花屑のやうに片寄り流し雛　　田中　藤穂
流し雛見えなくなりて子の手取る　　能村登四郎
ためらひし手より離れて流し雛　　久保東海司
手を放すときを失ひ流し雛　　窪田佳津子

と「手」を印象的に詠んだ句がある。桟俵は「神と人との交はりの道具」と書かれてあった。「手を離れ」といふ感情に溺れぬ押さへた表現に感動した。桟俵ぼっちを漢字で書くと「桟俵法師」と書くさうだ

◎　濡れ煎餅とは不思議なお菓子である。あの硬いのが取り柄ともいへる煎餅を湿らせて柔らかうして商品化した人は偉い。わたしは遠慮するが。好みはともかく濡れ煎餅の舌ざはりを思ひ出せないが、春の雨との関はりは繊細な作者の感覚にお任せする。

◎　文章で表現しにくい俳句らしい俳句。「秘密」はいつでも魅力があるものである。佳品である。

七郎衛門吉保

陽の高いうちの駆けっこ余寒かな
春浅し虐待ニュース吹き溜る
永き日や病棟跡に波郷の碑

◎　こどもは風の子と云ってもやはり外遊びはあたたかい内がよい。余寒の季節、公園などで駆け回ってゐる子を見守ってゐる句。「駆けっこ」といふ元気な平語と「かな」はそぐはないかな。

◎　作者は正義感の熱い人。よくニュースから刺激を受けて句をものする。虐待、特に子供への虐待ニュースには目を逸らしたくなる。このやうな俳句にするには難しい題材を採りあげてゐる。継続することで作者独自の俳句世界が生まれることをたのしみにしてゐる。

◎　波郷は胸を患って清瀬の国立東京療養所（現国立病院機構東京病院）で療養生活を送った。その縁で「清瀬市立清瀬中学校校歌」を作詞された。「永き日や」には先人へのおもひが込められてゐる。

石森　理和

誘はれて人ひと出店河津桜
今井浜ここなら静か河津桜
「ホーホケキョ」日の出の色に水平線

◎　作者の俳句を拝見するとよく旅行にお出かけになられてゐるご様子。今回は伊豆の河津へお出かけ。人出の多さと出店の賑やかさで落ち着いて桜を見る気分になれなかった様子。

◎　作者の水平線への拘りはみごと。「初旅や屋根より高く水平線」「一本の水平線や初茜」「飛魚や水平線を飛びだして」「藪椿水平線に沈む船」「水平線蜜柑の木よりひとつ捥ぎ」「ナセル湖に水平線や岩燕」「ふくよかに紫陽花つづく水平線」「野水仙水平線に今日の過ぐ」「烏賊釣舟薄紫に水平線」「合歓の花芭蕉は西施水平線」「水平線かき消すほどに霧深し」「新緑の急坂五分水平線」。水平線の句は皆面白い。作者が興味をもたれてゐるからである。朝ぼらけ、ほがらに鶯が鳴いてゐる。水平線も日の出と共に色づいてきた。前二句と違ひ詩情溢るる作品である。

秋川　泉

立春や写メにてしばしご挨拶
ひとりじめ春満月の金色を
老猫のはなヒクヒクと芹御飯

◎　「しばし」が分かりづらい。とりあへず「立春や写メにてまずはご挨拶」。「写メ」が俳句のなかで肩身の狭い思ひをしてゐる。

◎　ひとりじめしてゐるのが春満月ではなく、その月の色だといふところにこ

の句の良さがある。

◎　餌をあげるととりあへず猫は花をひくつかせてそのものに近づく。目を信用してゐ無いやうだ。魚を追いても指を近づけてもさうする。芹ご飯といふまだわたしも食したことのない料理に猫も興味津々に近づいてくる。経験の深い老猫でもさうかとおもしろがってゐる作者。

長崎　桂子

大寒や乾物二品と夕餉
童謡と唱歌コーラス四温晴
春立や寄せ植こんもり日に映えて

◎　わたしの回りに乾物屋はとうに消えてゐる。寒い中、夕餉の仕度を手抜きしやうといふことか。寒さ故といふことばかりでは無いだらう。下五、すこし調べを整へてはいかがか。「大寒や乾物二品にて夕餉」

◎　今時の小学校ではどんな歌が唄はれてゐるのだろうか。孫に聞いたら「ダサイ歌！」と一言で片づけた。子供のころは意味も分からず唄った歌を懐かしむやうになるものだが。孫もきっとさうなることだらう。「狭霧消ゆる港への」「春は名のみに風の寒さや」のやうな歌を仲間と唄ふひととき。同じ世界を愉しむ仲間がをられる。三寒をいっとき忘れる「四温晴」である。

◎　一年に一度訪れてくる「春」は何回経験してもうれしいもの。いや回数を経るほど春を大切に迎へる気になる。そんな気持ちが「春立つや」に込められてゐる。寄せ植えにした草もどこかしら春になり元気を取り戻し膨らんできたやうに見える。そんな些細なことに心ときめかすこのごろである。

篠田　純子

シャンパン色の燭の裸木丸の内
とげとげと言葉とことば風信子
老サックス奏者の革ジャン Danny boy

◎　シャンパン色のイルミネーションで飾られた裸木。色もこのやうに例へると新しくなった丸の内の光景がひときは新鮮に見えてきた。さて、シャンパン色とはどんな色であらうか。

◎　とげとげとした言葉が行き交ってゐる場。そこにヒヤシンスが活けられて

ゐた。作者はヒヤシンスを風信子と表記した狙ひがどこにあったのか。わたしにはヒヤシンスの方が音の響きに句への効力があるやうにおもへる。

◎　さうだ、「革ジャン」が冬の季語だと、気がついた。情緒纏綿と奏するテナーサックスでのダニーボーイに作者は心を掴まれたやうだ。アルコールが入ってゐれば尚更のことだ。「老奏者」なのが又よい。

須賀　敏子

目力を弱めてしまふ花粉症
山茱萸の花もじきねと早足で
万歩計二万三千蕗の薹

◎　どんな病気でもさうだが体験するのとしないのとでは雲泥の差がある。花粉症は命に関はるといふ事はないと思ふが、目がかゆい時など目を取りだして洗ひたくなる。この句は花粉症の人を観察した句。

◎　早足て挨拶をして去って行ったのが自己なのか、他者なのか。どちらとも読めるのが残念。作者の意図とは外れるかもしれぬが、主語が「春」だと面白いですね。

◎　単純な構造の句であるが、十分に意図の伝はる句。山野を歩かれ一休み。万歩計を取り出してみると、自分でも驚く歩数が出てゐた。傍らの蕗の薹を見る目も充実感に溢れてゐたことであらう。わたしも万歩計を付けて鍋横から高円寺の高島茂に校正のお願ひに通ったが、随分歩いたと思っても、一万歩に届かず八千歩ぐらいであった。二万三千歩とは賛嘆。江戸時代に万歩計があったら今より売れたかも知れませんね。

森　なほ子

赤信号渡りきる婆環八春
嬰の崩す積木の音や冴返る
三角の円の面積春の夢

◎　青信号で渡り始めた老人。とにかく歩くのが遅いのだ。本人は懸命に歩いてゐるのだが、渡りきる前に無情にも信号は黄から赤に変ってしまふ。「環八」はかんぱちと読む。東京では交通量の多い幹線道路の一つ。正式には東京都道３１１号環状八号線。六車線の広い道幅。信号の変る時間は歩くのが遅い人に

合せてくれてゐるはずだが、それでも間に合ない時がある。「環八春」には、その人が渡りきるのを待ってくれてゐるドライバーの眼差しが見えてくる働きがある。

◎　前句の「環八春」と違ひ「冴返る」と冷たい季語が斡旋されてゐる。積木を崩す行為と冴返るで遊びをする子への眼差しが複雑。

「嬰」の字の扱ひも複雑。字数から「こ」と読むのだらうが、ゆるされるのは俳句の世界だけかもしれない。「嬰児の積木崩して冴返る」。

◎　ときをり、昔の夢を蒸し返し見る。学校の夢もさうだったが書いてゐて気がつけば最近は見なくなったことに気がついた。全体夢を見る、いや覚えてゐることができなくなったのだらう。掲句は春の夢、さう、楽しい夢の範疇である。時を経れば、面積を求めるテストで四苦八苦されたことも又楽しい思ひ出になった。

定梶じょう

卵に淑気どの角度から見ても
麦を踏み途中のはずがゐなくなる
金髪でにっぽん人で日脚のぶ

◎「淑気」といふ季語はトランプで云ふとジョーカーのやうである。作者がこれは淑気だと思へば頷くしかない。この句も卵が淑気だといはれればそんな気がしてくる。作者、その辺りは先刻ご承知。「どの角度から見ても」とわたしの危惧を一掃した噛み応へのある一句にした。

◎　麦踏みを見てゐる人の句。まだまだつづく大変な作業だなあと目を一寸そらし戻したら麦踏みの人が消えてしまった。視界を遮る物もないのにどこに消えたのかと不思議がってゐる姿が面白い。

◎　ちょっと前なら黒髪を染めることに社会は抵抗があったかと。しかし今はさまざまな色に染めて愉しんだり自己主張したりしてゐる。芸能人はともかくアスリートにも及んでゐる。今はこのやうな人ばかりではない。本物の金髪で日本国籍の人がゐても不思議ではない。さういふ人をも含めて「日脚のぶ」といふあたたかい季語で応へる。しかし「日本」ではなく「にっぽん」といふ所に屈託が見える。今年の二月二十四日、日本人の鬼怒鳴門氏がご逝去された。

窓

田中　藤穂

私はいつも台所を背にして炬燵に入っている。今目の前のガラス戸の向うに見えるのは侘助だ。侘助はその名のとおり、気品高く華やかさは内に秘めている茶人のような花だ。遠く目をやると向うの高台に駒込病院が見える。夕方灯が点るとその中の病人や家族や医師をふと思うことがある。お天気の日はそちら側の空は夕焼けの茜色に染まっている。

窓

大日向幸江

今日も富士山の方向に陽が真っな顔をして沈む。宵の口から蛍が飛び交い農業用水の流れる暗渠から蟇蛙の合唱が一晩中聞こえた。

私達がこの土地に引越して来たのはそんな理由があったから。子供一人と猫を連れ希望を持って引越した新しい町は楽しかった。今はアスファルトで固めた住宅街はあの40年前の自然溢れた町とは別物になった。

道

森　なほ子

誰にも「思い出の道」は幾つかあると思います。私の「思い出の道」は、小学校への通学路です。子供の足で30分くらい、朝は国道を使ったけれど、帰りは国道に平行した田んぼ道から帰るのでした。一面の稲の中の作場道、車も通らずトンボやイナゴを追いかけて。遠い山並は苗場山と教わり、春先には雪形を見つけ。いつかあの山に行ってみたいと憧れたものでした。

道

秋川　泉

道路と土手と塀。岸田劉生「切通之写生」という百年前の東京を画いた絵画。この坂道を登りきった向う側に何があるのか。関東ローム層の赤土の坂道は、私の子供時代の原風景にそっくりで、私はこんな所で遊んでいた。東京ではない横浜の擂鉢の底。鎌倉に近い山村であった。雨が降ればねとねとになる赤土。下駄や靴の底にべったりとくっついてうんざりの道。今は舗装されそんな道はどこにもない。この書かれた道に惹きつけられて、私の心はどこか遠くを浮遊する。

箸

友からの箸使ひ初む茸飯　山荘　慶子
雪の日の一句を記す箸袋　森山のりこ
菜箸の両端つかふ木の芽雨　竹内　弘子
箸置いてしばらく涼し鉦叩　鎌倉喜久恵
曼珠沙華さいごは箸と塵取で　篠田　純子
菜箸の指揮棒まひたけしめぢかな　竹内　弘子
蕎麦の箸薬味に一本根深葱　石森　理和
郭公や箸置きてはや眠気さし　鈴木多枝子
何は扨皆の箸出す五万米炒る　石森　理和
春愁の箸折りて出づ軽食堂　渡邉　友七
鮎を食ぶ儀式のやうに箸つかひ　鎌倉喜久恵
箸をとり置くまで秋の科かな　佐藤　喜孝
辨当に添へる箸置もみぢの葉　芝　尚子
掻き分けて銀杏拾ふ箸の先　田中　藤穂
屋久杉の箸かろやかや新豆腐　佐藤　恭子
馬手に箸豊葦原の新米喰ふ　石森　理和
マカロニの穴に箸先遠花火　篠田　純子
箸づかひ下手なるままに蕨餅　佐藤　恭子
箸買うて寄道したるお萩かな　芝　尚子
おでん鍋先づ大根に一の箸　竹内　弘子
紫蘇の実を箸でしごくも七年忌　長崎　桂子
一呼吸して箸を出す海鼠かな

箸立がまん中にある春燈　佐藤　喜孝
春寒や箸に辿れる被災地図　竹内　弘子
決断の箸つけにけり茸汁　井上　石動
声弾み箸つく春菜母娘旅　七郎衛門吉保

橋

吊橋の少し揺れゐる初紅葉　鈴木多枝子
勝鬨橋は戦捷記念都鳥　芝　尚子
西湖とて渡月橋とて水温む　堀内　一郎
鳥曇トラックに橋揺すらるる　篠田　純子
初午や三輪橋から王子まで　竹内　弘子
歩道橋上がれば春のみづたまり　佐藤　喜孝
揚げ雲雀架け橋さがしさがし啼く　渡辺　友七
待ち合す言問橋や梅雨の傘　関口　ゆき
十二橋辺りも時雨して居らむ　堀内　一郎
万年橋清洲橋花見船くぐる　堀内　一郎
花菜風利根川橋は県境　赤座　典子
大利根の橋にもたれて雪女　佐藤　恭子
藤房の陰に三橋敏雄かな　堀内　一郎
橋たもと何故かなつかし更衣　堀内　一郎
旅立つにキップはいらぬ虹の橋　後藤　志づ
河童橋オレンジ色のパラソルで　須賀　敏子
滝飛沫橋の朱塗りをあざやかに　栢森　定男
吊橋は畑へ行く道雲の峰　石森　理和

唐黍を背負ひ吊橋帰り来る　石森　理和
秋のドナウさびた浮橋渡り切る　鈴木多枝子
猫柳土橋短き野川かな　芝　尚子
佐保橋の下に佐保川梅日和　佐藤　喜孝
雲を恋ふ野雲雀架橋の音曳きて　渡邉　友七
石橋を叩いてわたり冷やつこ　堀内　一郎
水音の涼しさいつも吊橋に　鈴木多枝子
三々五々歩道橋より遠花火　赤座　典子
雲の山虹の橋越え天竺へ　佐藤　喜孝
秋出水面影橋の水位標　後藤　志づ
さめざめと紅葉且つ散る橋の上　篠田　純子
冬紅葉碓氷峠のめがね橋　須賀　敏子
雲雀野の朽ちし一橋蝶と往く　渡邉　友七
池の橋園児鈴生り春の雲　田中　藤穂
橋から橋へ五十三次明易し　佐藤　喜孝
ひぐらしに手をとられゆく橋がかり　森山のりこ
五人ずつ渡る吊橋初嵐　堀内　一郎
美人から秋思の橋を渡りけり　長崎　桂子
冬紅葉通天橋にしきつめて　須賀　敏子
中央道甲斐より信濃へ虹の橋　赤座　典子
待ちし甲斐ありて二重の虹の橋　早崎　泰江
炎天の遥けき橋の無音なる　鎌倉喜久恵
反橋の霜すらすらと流れけり

橋ありて霜深くあり鹿わたる　佐藤　喜孝
立ちこぎの少年白雨の橋を越ゆ　篠田　純子
十六夜の面影橋にうごく影　田中　藤穂
川沿を行けば橋あり秋の風　鈴木多枝子
橋桁の初霜なでて出勤す　鎌倉喜久恵
救急車春は野を越ゆ橋わたり　定梶じょう
数寄屋橋土橋新橋橋なくて　篠田　純子
猫柳生ま八橋は母に買ふ　定梶じょう
黒船橋から猪牙でくり出す花見かな　篠田　純子
吊橋をゆらりゆつくり山桜　須賀　敏子
下山せし光岳より虹の橋　須賀　敏子
佃島橋を渡って冬に入る　定梶じょう
丸木橋朽ちてそのまま冬に入る　鎌倉喜久恵
盆をどり丹塗の小橋わたりゆく　竹内　弘子
空堀を埋める落葉理想橋　田中　藤穂
新橋裏歩める冬の孕猫　篠田　純子
花吹雪浴びて渡りぬ朱塗橋　森山のりこ
鉄橋にトロッコ電車山桜　赤座　典子
桜しべ踏まねば小橋渡られぬ　鎌倉喜久恵
夜釣人板一枚の橋渡る　鎌倉喜久恵
憂き日々に思ひがけなき虹の橋　早崎　泰江
重ね着を脱ぎつ指折り東郷橋　藤野　寿子
むつまじき限り小春の中野橋　藤野　寿子

あとがき

カットのこと

「あを」は他誌とは違ひ少部数発行してゐます。印刷所にお願ひする環境ではありません。俳誌として相手にされないケースもあります。しかしこのことをマイナスと思はず利用しやうと「あを」を続けてゐます。その一つがカットであり扉のページです。「前月抄」のカットに樽本翔馬君が寄稿してくれました。樽本翔馬君は須賀御夫妻のお孫さんです。児童画は俳句雑誌に相応しくないといふ声もあるかと思ひますが、肩肘張らぬ気取らぬ「あお」の誌風にピッタリかと喜んでをります。

令和先取り花見之宴

四月二日、平成最後の「あを」のお花見を赤座邸を句会場に催されました。作品の成果は順次発表されることと楽しみです。

七郎衛門吉保さんはこの宴を早速アルバムに纏めていただきました。枕元において時々皆様の笑顔を眺めてをります。あらためて自分の顔を見るとだうして笑顔が下手なのかと残念に思ひました。むかし「百万ドルの笑顔」といふキャッチフレーズがありました。皆様本当にその言葉がピッタリのお顔で収まってゐます。わたしも笑顔のつもりだったのですが、残念ながらいまいちでした。次回には心残りのない笑顔と心した次第です。

（喜孝）

二〇一九年四月号
発行日　三月二十二日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
樽本翔馬
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）